山光一 阿川佐和子 阿川弘之
秋山駿 有吉玉青 飯田深雪
辺見庸 一郎 井坂洋子 五木寛之
出孫六 絲山秋子 井上明久
橋邦枝 大岡信 大河内昭爾
村彦次郎 小川国夫 尾崎左永子
田光代 加藤幸子 上坂冬子
上弘美 川本三郎 北杜夫
下順二 久世光彦 倉嶋厚
池昌代 小堺一機 小関智弘
林恭二 E・G・サイデンステッカー 坂口綱男
藤愛子 篠田桃紅 清水良典
木忠志 曽野綾子 高井有一
田宏 高橋源一郎 高橋三千綱

ベスト・エッセイ2005

成り行きにまかせて

日本文藝家協会編

編纂委員＝高田宏／津島佑子／増田みず子／三浦哲郎／三木卓

光村図書

ベスト・エッセイ2005

成り行きにまかせて

日本文藝家協会編

編集委員＝高田宏／津島佑子／増田みず子／三浦哲郎／三木卓

光村図書

成り行きにまかせて

二〇〇五年六月三十日　第一刷発行

編　者——日本文藝家協会
発行者——常田　寛
発行所——光村図書出版株式会社
東京都品川区上大崎二-一九-九
郵便番号一四一-八六七五
電話〇三-三四九三-二一一一（代）
印刷所——株式会社加藤文明社
製本所——株式会社難波製本

©Nippon Bungeika Kyokai 2005 Printed in Japan
ISBN4-89528-332-1　C0095

価格はカバー・帯に表示してあります。
本書の無断複写（コピー）は禁じられています。
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ベスト・エッセイ２００５　成り行きにまかせて

目　次

歌の流れる街　五木寛之　10
ある安らぎ　小林恭二　18
アッと思った「雲いろいろ」　山下一海　23
「１０９―②」からはじまる　高橋源一郎　27
古（いにしえ）の海の匂い　諸田玲子　34
犬に似る　坪内稔典　40
入れ歯を食いしばって　小関智弘　44
岩莨（いわたばこ）　吉田知子　47
怨みの才能　久世光彦　52
大人になることの難しさ　なだいなだ　56
オリンピア、重い疲れ　小川国夫　61
科学への憧れ　増田みず子　65
駆けくらべ　鶴見俊輔　73

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

酒　北杜夫　152
佐世保海軍工廠　大河内昭爾　157
五月雨、梅雨、栗花落、五月晴　倉嶋厚　164
三杯目にはそっと出し　絲山秋子　169
詩人の孤独な叫び　司修　177
釋迢空といふ名前　丸谷才一　182
車内読書の楽しみ　川本三郎　187
上機嫌・不機嫌を繰り返して　上坂冬子　195
小説は今日の中身描く　秋山駿　200
書物の山と「活字まみれ」　清水良典　205
すこしさびしい関係　三木卓　213
空飛ぶもの　井坂洋子　220
タテとヨコの話　池辺晋一郎　226

風の島で見つけた本　蜂飼　耳　76
「かたじけない」　小池昌代　82
カプリ島にて　曾野綾子　90
軽井沢今昔　阿川佐和子　100
川べりのライバル　三浦哲郎　105
気になることば　日高敏隆　108
奇妙な美術館　村松友視　114
牛肉とブンガク　久間十義　118
黒い戦闘機　横尾忠則　123
小犬のワルツ　中村紘子　125
小芋　田辺聖子　132
「去年今年（こぞことし）」は季語だった！　大岡　信　142
最新設備　皆川博子　147

父と子――藤村と楠雄の場合　井出孫六　232
父の歳越えて知る存在感　坂口綱男　237
疲れのかたち　堀江敏幸　241
釣人は点景たれ　もりたなるお　246
東京の八月を歩く　出口裕弘　250
動物画コンクール　高田　宏　255
どこへ行く、子供たち　佐藤愛子　258
中上健次と会った夜　高橋三千綱　262
成り行きにまかせて　津島佑子　271
南極で流しソーメン　小堺一機　276
初釜の感懐　有吉玉青　281
花の名前　南木佳士　286
薔薇（ばら）の記憶　尾崎左永子　291

晩夏の蟬（せみ） 光を浴びて　岩橋邦枝　296
樋口一葉の現代性　田中優子　301
左手だけのピアノ演奏　舘野　泉　304
ひと　篠田桃紅　308
一〇〇円文学全集は現代の「円本」か　山内宏泰　313
百歳からの日々　飯田深雪　319
古山高麗雄を偲ぶ　阿川弘之　324
文士の妻たち　大村彦次郎　329
ベンチで水を飲む　南　伸坊　333
ぽつんと「偏奇館跡」　井上明久　341
本棚と老年と　古井由吉　345
幻の演劇　蜷川幸雄　350
ミス・ウォーカー　林　京子　355

水上勉さんと私　高井有一　360
茗荷谷の鳥おじさん　川上弘美　367
やっぱり別れるなんてできない　角田光代　371
谷中、花と墓地　E・G・サイデンステッカー　378
谷中墓地　空襲の一夜　吉村　昭　384
「幽霊」のこと――見えないものとの闘い　鈴木忠志　389
夢の不思議　加藤幸子　394
楽天的文学青年の七十年　青山光二　399
螺旋形の〝未来〟　木下順二　404

装幀＝三村　淳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ベスト・エッセイ２００５

成り行きにまかせて

歌の流れる街

五木寛之

街頭で歌がきこえなくなって、街がとても淋しくなったような気がする。

私が若いころまでは、街にはいつも歌が流れていた。流れ行く歌、つまり歌謡曲やポップスのメロディーである。

先月、近江の寺を回るため、京都にいった。あの巨大な京都駅の構内に、絶えず歌声が流れていて、懐かしいというより、なんとなく不思議な気がした。雑踏の中でどこからか歌声が降ってくるという感覚を、ながいあいだ忘れていたせいだろう。

その歌は、かつて山口百恵が歌って大ヒットした『いい日旅立ち』だった。ＪＲのコマーシャルにもなり、当時は「日本のどこにでも」その歌が流れていたものだ。

どうやらその曲がカバーされて、ＪＲ西日本のコマーシャルとして復活したらしい。歌っているのは鬼束ちひろという若い世代に人気のある歌手だと聞いた。

駅のホームにも、地下のショッピングモールにも、通路やエスカレーターにも、その歌は流れていた。しかし、なにかひとつ、しっくりこない印象があった。たぶん、街頭に歌が流れているという街のたたずまいを、こちらがすっかり忘れてしまったせいかもしれない。

私が九州の山村から上京したのは、昭和二十七年である。福岡の街は知っていたが、東京は幻の街だった。

銀座、新宿、丸の内、隅田川、有楽町、赤坂、六本木、などすべて歌の文句で知っている地名ばかりである。

〈花咲き花散る宵も
　銀座の柳の下で

というメロディーは、少年の私の心に大都会東京のイメージを、いやが上にもかきたてずにはおかなかった。

〈かがやく聖路加か
　はるかに　朝の虹も出た
誰を待つ心
　淡き夢の町　東京

などという歌もあった。当時の私には「聖路加」という言葉の意味がわからなくて、ただ「セイロカ」という音に無限の想像力をふくらませたものである。

やがて『有楽町で逢いましょう』だの、『西銀座駅前』だの、『ワン・レイニー・ナイト・イン・トーキョー』だの、『池袋の夜』だの、東京のあらゆる地名が歌に歌われ、どこにいてもそのメロディーがきこえる時代がきた。

『ブルーライト・ヨコハマ』が街角に流れているころ、私は横浜の街を歩き、『銀座の恋の物語』を背中にききながら夜の街をさまよっていた。歌と街とが一体となって存在していたとても幸福な時代だったような気がする。

街角の歌が変化しはじめたのは、たぶん、イエロー・マジック・オーケストラの乾いた音が街に流れはじめたころからだろうと思う。

歌から音へ、メロディーからリズムへ、と、見えない変化が街の風景を変えはじめる時代だった。そして、いわゆる流行歌、歌謡曲のジャンルが、潮が引くように流行の表舞台から消えていった。

先日、帝釈天（題経寺）を訪れて、柴又の街へいった。頭の中では、たぶん門前の商店街では『男はつらいよ』の主題歌が流れているに違いないと思い込んでいた。

しかし、京成電車の駅前に寅さんの銅像はあったが、街にその歌はきこえなかった。山本直純さん作曲の主題歌は、日本の歌謡曲には珍しいメジャーのヒット曲である。私は芸大出身の優れた音楽家だった山本さんが、国民的な大衆歌謡を残したことを、とてもすばらしい仕事だと思っていたのだ。

もう一つ、柴又でききたい歌があった。『矢切りの渡し』である。『矢切りの渡し』の舞台になった舟着き場で、船頭さんにその歌のことをたずねたが、あまりはっきりした答えは返ってこなかった。もちろん、その一帯でも、歌は流れていなかった。典型的なマイナーコードの『矢切りの渡し』と、『男はつらいよ』の二曲が流れていない柴又は、なんとなく淋しい気がした。レコード店で土産にその歌のCDでも買って帰ろうかと探したが、どこにもレコード店は見当たらなかった。

「金町までいけばあると思うけど」

と、地元の商店街のお兄さんは言っていた。

以前、「歌謡曲のない日本列島には住みたくない」と発言して、笑われたことがある。しかし、私は本当にそう思っているのだ。

日本人の歌を探せば、結局はそこに落ち着くのではあるまいか。平安時代の今様から、声明、和讃、ご詠歌、琵琶法師の語りもの、長唄、浄瑠璃、端唄、小唄はもちろんのこと、浪曲、民謡など、日本人の心情はすべて明治・大正・昭和・平成期の歌謡曲の世界に流れ込んでいる、と私は考えているからだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com